

第2の家を創る

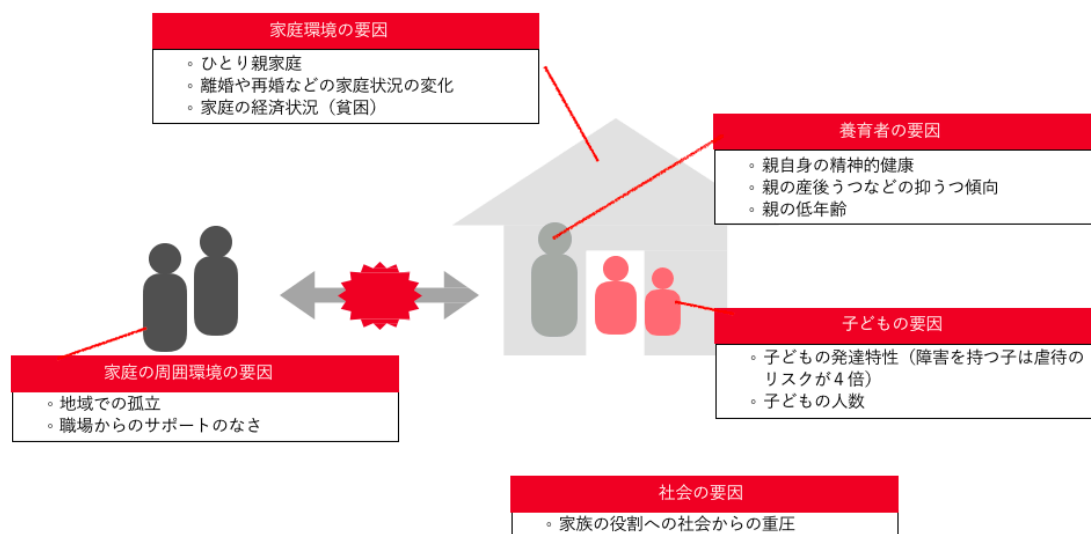
3年1組17番 芳賀 彩音

Keyword: 「寂しい」「子ども食堂」「コミュニティ」

1. はじめに

私は幼少期に母を亡くし、ひとり親家庭で育った。周りには同じ境遇の人が少なく、自分の辛さを理解してくれる人がいないと感じ、「他の家庭とは違う」「誰もわかってくれない」という孤立感を幼いながらも強く抱いていた。スクールカウンセラーへの相談も考えたものの、周囲の目が気になり、寂しさを隠して平気なふりをして過ごしていた過去がある。私自身、辛い過去を経験したからこそ、孤立する環境を生み出さないために、「第2の家」を提供する計画を考えた。

2. 序論



福丸由佳（2012）「家庭におけるハイリスクの親への支援」を参考に作成

Copyright©2020 PIECES All Rights Reserved.

私は以前に児童虐待について探究していたことがある。上記の図のように、虐待の原因として、子育てする親の寂しさや孤独感、周囲の家庭と住居や経済的に孤立することからのストレスが挙げられる。このように、孤立は虐待を悪化させ、心身の健康に悪影響を与えるだけでなく、現代社会では自殺や犯罪の増加といった深刻な問題にもつながっている。また、虐待されて育った親は子どもに虐待するという「虐待の連鎖」も発生してしまう。現代社会における孤立は、「寂しい」という感情が原因であると考えられる。この感情は人によって異なるが、多くの場合、他者との比較や劣等感がその根底にある。自己価値の喪失感が強まると、最終的に社会的孤立へと陥りやすくなる。孤立することで、他者からの承認や自己肯定感が失われ、さらに人間関係の信頼感も薄れ、孤立が繰り返されるという負のスパイラルに陥ることが指摘される。この現象は特に、子供たちの孤立問題において顕著であり、現代日本においては、10人中3人の子供が孤立状態にあるとされている。孤立する子供たちの主な悩みとしては、「相談できる相手がいない」「他者の視線が気になり、支援機関を利用することができない」といった点が挙げられる。

3. 本論

子供たちの孤立を防ぎ、支え合える環境を提供するために、「第2の家」というコンセプトを提案したい。「第2の家」とは、子供たちが困っているかどうかに関わらず自由に集まり、互いに助け合い、支え合う「共助」のコミュニティだ。この場があれば、子供たちは心から安心できる場所を持ち、国際高校での生活がより豊かで充実したものになるだろう。このアイデアの参考として、奈良県生駒市にある「チロル堂」という駄菓子屋兼コミュニティスペースでボランティア活動を行った。チロル堂では、100円でガチャガチャを引くことができ、その中にある「チロル札」を使ってお菓子や食事を手に入れる仕組みになっている。一見、経済的に苦しい状況の子供たちも多く集まる場所に思えるが、夜には「チロル酒場」という居酒屋に変わり、その収益が寄付金として運営費に充てられている。この仕組みは、地域全体が協力し合い、子供たちの支援に貢献している良い例だと感じた。

チロル堂で担当したボランティア活動は、駄菓子の補充や子供たちのお会計を行うことだった。一見簡単に思える作業だったが、実際には商品の値段を覚えるのに苦労し、会計に時間がかかることも多々あった。しかし、そのたびに子供たちが「これは〇〇円だよ」と親切に教えてくれて、無事に作業を進めることができた。この経験から、子供たちが主体的にコミュニケーションを取り、互いに支え合う環境の大切さを学んだ。

この経験を通じて得た「共助」の重要性をもとに、国際高校にも「第2の家」を実現し、子供たちが心から安心して集まれる場を提供したいと考えている。チロル堂には「おかえり」と言いたくなるようなアットホームな雰囲気があり、地域の人々に愛されている。

一方で、子供たちと接する中で、孤独を感じている子供もいることに気づかされた。ある小学生は、両親が多忙で家では一人で食事をとることが多いと話してくれた。しかし、その子はチロル堂では非常に明るく、友達と楽しそうに過ごしていたので、家で孤独を感じているとは思わなかった。彼に「寂しくないの?」と尋ねたところ、「最初は家で一人で寂しかったけど、ここに来るようになってから、みんなと一緒に何かをすることが楽しくなったし、休日にそのことを両親に話すのも嬉しい」と答えてくれた。この子の話に深く感動し、誰もが気軽に集まれる共助のコミュニティ「第2の家」を作りたいと強く決意した。

「第2の家」は国際高校ならではの特色を備えるべきであると考え、そのための3つの提案を行いたい。まず一つ目の提案は、「世界の言語」の授業を子供たちとともに体験することだ。普段接する機会の少ない多様な言語に触れることで、子供たちの好奇心が喚起され、彼らの学びの幅が大きく広がると期待できる。これは異なる文化や価値観への理解を促し、将来的な国際感覚の土台を築く重要なステップとなるだろう。

次に二つ目の提案は、「留学生との積極的な交流」の機会を設けることだ。異文化に触れることで、新たな視点や考え方を学び、多様性を尊重する柔軟な思考を育むことができる。また、留学生との交流は生徒たちが孤立感から解放され、安心して学校生活を送るための精神的な支えともなるだろう。このような交流の場は、共感や理解を深め、互いに支え合う関係の構築に役立つ。

最後に三つ目の提案として、「世界のダンス部」という国際高校ならではの部活動を通じて、さまざまな国や地域のダンスに挑戦することだ。異なるダンススタイルを楽しみながら体を動かすことで、健康を促進するだけでなく、リズム感や表現力の向上にもつながる。さらに、ダンスを通じて仲間とのコミュニケーションが深まり、連帯感が生まれることで、学校生活がより豊かなものとなる。

[実際のボランティアの様子]



これらの提案によって、生徒たちは「第2の家」として国際高校を心から愛し、安心して学び、成長できる場となることを目指したい。国際高校が持つ「グローバルが生み出す力」を活用し、子供たちが多くのコミュニケーションを通じて孤立感を克服できる場を作りたい。私たちが多角的に関わることで、子供たちが感じている「寂しい」や「つらい」といった感情に気づき、それを表現できるように支援していくことができる。また、コミュニケーションを通じて、自分の本当の気持ちを自然に表現する力を育むことができるだろう。

4. 結論

現実的に考えると、「第2の家」の創立には多くの時間と労力が必要であり、私一人の力では成し遂げることは難しいかもしれない。しかし、高校卒業後もチロル堂でのボランティア活動を続け、その延長線上で、将来的には多様性を尊重し、国際的に人々を支援する「第2の家」を設立したいと考えている。私は、この探究活動を通じて、人との関わり方や助け合いの重要性を深く理解することができた。

5. おわりに

看護師を志す私にとって、この経験は患者の感情を理解し、寄り添うための貴重な学びとなった。現代社会では孤立が原因とされる犯罪や自殺、精神的な病気が深刻な問題となっており、これは世界的な課題でもある。私は、この問題に対して積極的に取り組み、一人でも多くの人が孤独を感じることなく、より良い未来を迎えられるよう貢献したいと強く願っている。

6. 参考文献・出典

チロル堂ホームページ <https://www.tyroldo.com> (2022/01/13)

日本財団ホームページ <https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2024/98154/childcare>
(2024/1/11)

PIECESホームページ <https://www.pieces.tokyo/issue> (2024/06/04)